

「お願い叶えてパラドレスト」

脚本

小林

昂平

グレイ（19） 天才博士、リアリストで排他的。

マオ（20） トレジャーハンター、楽天的でロマンを追い求める少女

アール（??） 万能ロボ、グレイの助手を務める。たまに好奇心や悪ノリを見せる

ドミニク（33） 名家貴族の4男、お金の力で何でも欲しいものを手に入れようとする

ライラ（19） ドミニクの側近、強気な性格の双子の姉で銃を使った戦闘が得意

ミイナ（19） ドミニクの側近、優しい性格の双子の妹で治療や料理が得意

フィリアスカ（29） 女盗賊、ビューティートリニティの頭で美を追い求める

ジード（24） フィリアの部下、ヤバイ右手を持っているお馬鹿な双子の兄

カーバ（24） フィリアの部下、スゴイ左手を持っているまともな双子の弟

御使い（??） パラドレストの案内人

0. 10年前、マオと父の回想シーン

父（声）「なあ！知ってるかマオ？この世界には『どんなお願いも叶えてくれる無敵のお宝』

が有るって言う伝説の話！」

マオ「むてきのおたから？」

父「そうだ、あらゆる困難を乗り越えて辿り着いた者だけがお願いを叶える事が出来るって言う、

トレジャーハンターの間では有名な話なんだ」

マオ「そっかーもし本当にそんなお宝がこの世界に有ったら、お母さんの病気も治せたのかな？」

父「……そうだな、父さんがもつと早く見つけることが出来ていたら、母さんを救う事が

出来たかもしれない。すまねえなマオ」

マオ「平気だよ！だって私には、お父さんが居てくれるから」

父「……マオオオ！！お前は本当に最高の娘だああ！！！」

マオ「やめてよお父さん苦しい……あとヒゲいたい……」

父「なあマオ、もし父さんがお宝を見つけたらお前はどんなお願いを叶えて欲しい？」

マオ「え？おねがいなあ……むむむ」

父「なんだっていいんだ、無敵のお宝だぞ。どれだけ無理難題だったとしても、

きつと叶えてくれるに違いない！」

マオ「じゃあ、世界中の人のお願いを叶えて欲しい！みくんながお願いを叶えて

幸せになれたら、そんなに素敵な事ってないもんね！」

父「なんて健気なんだマオオオ！！お前こそがこの世界の宝だよおお！！！！」

マオ「やめてよお父さん苦しいあとヒゲ、ヒゲがヤダ」

父「よし！じゃあマオのお願いを叶えるためにも、父さん今度こそ必ず無敵のお宝を

見つけてくるからな！」

マオ「ねえ、お父さん。その無敵のお宝って何て名前なの？」

父「おおそうだったな、良いかよく聞け。無敵のお宝の名前はな……『パラドレスト』だ！！」

マオ「パラドレスト」

OP、星降りの夜を思わせる演出

1. 10年後、4の月1の日、グレイの秘密基地

マオ「と言う訳であれから10年、トレジャーハンター・マオとして生きる事になった私は、

パラドレストを探す冒険の旅に出たのでした！そこから先は正に波乱の連続で……」

グレイ「おい、おい！」

マオ「何ですか、ようやくプロローグを終えてこれからって時に！」

グレイ「何ですかじゃねえよ、勝手に人の家上がり込んできたかと思ったら急に壮大な自分語り

始めやがって」

マオ「いや、あなたが『何しに来たんだ』って聞いてきたから、分かりやすく1から説明して……」

グレイ「だからって生い立ちから話さなくて良いんだよ。簡潔って言葉を知らねーのか」

マオ「じゃあ……パラドレスト探しに協力してください！！」

グレイ「極端だな！ちようどいい落としどころねーのかよ」

マオ「もう色々細かいですねえ、流石気難しいと評判の人だ」

グレイ「なんで俺の方が厄介者みたいになつてんだよ」

マオ「お願いですから協力してください！あなたしか頼める人が居ないんです、人類史上最高の

頭脳を持っていると噂の天才博士、ドクター・グレイさんにしか！」

グレイ「断る。大体俺は科学者だぞお宝探しは専門外だつての」

マオ「いえ違います、私がグレイさんをお願いしたいのはある物を発明してほしいんです」

グレイ「ある物？」

マオ「はい！なんかこう、どんな障害でもぶち壊せるスーパービームみたいな、そういう感じのもの発明してほしいんです」

グレイ「意味が分からない」

マオ「もおー！天才ならこれくらい秀囲気で理解してくださいよ！！」

グレイ「自分の語彙力の無さを恨め、そして早く帰れ」

マオ「……分かりました」

グレイ「意外と素直だな」

マオ「それじゃあ適当に役立ちそうな物を借りていきますね、トンデモ兵器はどこでつつつかう」
グレイ「お、おい奥には入るんじゃないやねえ！待ちやがれ！！」

マオOUT, グレイ後を追ってOUT, ブル転

マオ「へえー意外と奥は広いんだな……ん？何だろコレ、人形？」

アール「アンノウンの接近を感知、迎撃態勢に移行します」

マオ「え？」

アール「ナツクル、アクション」

衝撃SE, マオぶつ飛んで悲鳴と共にOUT, グレイIN

グレイ「はあはあ……遅かったか……」

アール「おはようございますマスター、ただいま正体不明の賊を一体排除しました」

グレイ「見りや分かるよ、その調子だとデータチェックは無事終了したみたいだな」

アール「はい、オールクリアです」

マオ、ふらふらでIN

マオ「ぐ、グレイさん」

グレイ「おお生きてたか、頑丈な奴だ」

マオ「何なんですかその子は？いきなり人を殴り飛ばすなんて非常識です！」

グレイ「非常識とかテメエが言うな」

アール「ボクの名前はアール。マスターの助手をやっている高性能ロボです」

マオ「助手のロボ？……ええ！？グレイさんそんなものまで作れるんですか！?!?!」

アール「マスター、この方はお知り合い合いなのですか？」

グレイ「そんなんじゃないよ、俺にもよく分からんなにかだ」

マオ「私の名前はマオ。トレジャーハンターをやっています！」

アール「トレジャーハンター？」

マオ「はい、実は10年前……」

グレイ「ストップだ、その話はもういい」

マオ「えー！」

グレイ「つーかい加減出ていけ。こっちはテメエの夢物語に付き合えるほどヒマじゃねえんだ」
マオ「夢物語って、パラドレストの事信じてないんですか？」

グレイ「俺は科学者だぞ、何でも叶える無敵のお宝なんてもん信じるわけねーだろ」

マオ「さてはグレイさんてば知らないんですか？10年前に起きた『星降りの夜』の事！？」

グレイ「……アール」

アール「了解、ダイアリーポイント起動」

D P P ・星降りの夜

マオ「な、なんですかこれ！？」

グレイ「アール、解説を」

アール『『星降りの夜』10年前に世界各地で確認された謎の現象。無数の光が降り注いだ後、

多くの人間のお願いが叶ったと言う事例が同時多発的に確認され、あくまで伝承の域を

出なかつたパラドレストの存在が広く信じられるキツカケとなった事件である。解説終了」

マオ「なんだちゃんと知ってるんじゃないや……て言うかアールくんすご！何ですか今の機能？」

アール「ダイアリーポイント、略してD P Pは、ボクのメモリーに記録されたデータを

瞬時に映像化する機能です。結構便利なのでもっと褒めてくれてもいいですよ」

マオ「あ、意外と欲しがり屋さんだこの子」

グレイ「『星降りの夜』確かに未だ全容が解明されていない不可思議な現象だ。世界中の人間が証人である以上、幻覚の類であるとも考えにくい」

マオ「それなら……」

グレイ「だがこの事件とパラドレストが実在するかどうかは何ら因果関係を証明出来るものではない。よって俺はパラドレストなんて物の存在を信じない」

マオ「頭の固い人ですね〜もつと夢やロマンを持って生きようとは思わないですか!？」

グレイ「俺は科学的根拠に基づく物か、自分の目で見たものしか信用しない事に決めている」
マオ「……なら、とっておきのブツをお見せしましょう!」

グレイ「あ？」

マオ「アールくん、これを!」

アール「了解、D P P 起動」

D P P ・ P 研究資料

グレイ「……なんだこれは」

マオ「これはパラドレストに関する研究資料です。お父さんがトレジャーハンターとして

30年追い続けたパラドレストの秘密が、全てここに記されているのです!!」

グレイ「ていうかアール、何でデメエがコイツのアシストしてんだ」

アール「何となくノリで体が動いてしまいました。えへ」

グレイ「かわい子ぶってんじゃねーぞポンコツが」

アール「始まりますよクソ雑魚マスター」

グレイ「ああ？」

マオ「パラドレストの秘密その1、パラドレストは常にこの世界に存在しているわけでは無く、

『10年に一度、4の月4の日にのみこの世界に現れる』と書いてあります」

アール「星降りの夜がちょうど10年前、今日が4の月1の日ですからあと3日しかありませんね」

グレイ「その資料がホンモノならの話だがな」

マオ「パラドレストの秘密その2、10年に一度現れるお宝の在り処はS級の危険区域に指定

された雷雲地帯で、それはもう大変危険な場所だと書いてあります」

アール「無敵のお宝と呼ばれるだけあってガードが固いんですね」

マオ「その通りなのだよアールくん」

グレイ「何でちよつと連携取れ始めてるんだよ」

マオ「そこでグレイさん思い出してください！私最初に『どんな障害もぶち壊すスーパービーム

を開発してください』って言いましたよね？」

グレイ「……その雷雲をふっ飛ばしちゃえば、パラドレストへの道が開けるってか」

マオ「その通りです！流石天才博士察しが良い！それでは続いて、パラドレストの秘密その3……」

グレイ「もういい十分だ、アールも悪ノリはその辺にしておけ」

アール「……了解」

マオ「どうしたんですか、ここからが良い所なのに……」

グレイ「仮に、テメエが言っている事が全て事実だとしよう。パラドレストは実在し、それを手に入れるには3日以内に雷雲をぶち壊せる兵器を用意する必要があると」

マオ「そうです。ようやく信じる気になってくれたんですね！！」

グレイ「だがそれらが全て事実だったとして、俺がテメエに協力しなければならない理由は何処にもない。故にこの依頼は却下だ」

マオ「そんなあ……ねえアールくん、なんとかならない？」

アール「マスターが依頼を受ける条件は、依頼自体に価値を見出すか、多額の報奨金を貰うかの2択です。マオさん今の所持金は？」

マオ「……………お昼ご飯を奢るくらいならなんとか」

グレイ「帰れ」

マオ「待ってください！！そこを何とか出世払いでえ…………」

ドミニクIN

ドミニク「なら、その報奨金は私が払おう！」

マオ「え？だれですか！？」

グレイ「ドミニク……………テメエいつからそこに」

ドミニク「お嬢さん、話は聞かせていただいたよ。パラドレストについて随分詳しいようだね」
マオ「は、はい。あの…………」

ドミニク「申し遅れた。私の名前はドミニク・シャドウフアング。以後お見知りおきを」

マオ「あ、私はマオって言います……って、シャドウフアング!? それって確か数百年続く

名家貴族の名前じゃ…」

アール「ドミニク様はシャドウフアング家の4男に当たるお方です。ああ見えてマスターの

お得意様なんですよ」

マオ「そうなんだ、なんか意外な組み合わせ」

ドミニク「さて本題だドクター・グレイ。パラドレスト攻略の為の兵器開発、私からも

是非お願いしたい」

グレイ「欲しいモンは何でも買える金持ちのボンボンが、今更何をお願いするっていうんだよ」

ドミニク「愚問だな、叶えたい願いなど幾らでもあるさ! いいかいドクター・グレイ人間の欲望

とは無限なのだよ。何を手に入れようとも決して満たされる事がない、より良き物を

より新らしき物を欲してしまう。そんな溢れ出る欲望を満たすにはもう…」

マオ「あの一……!」

ドミニク「なにかね?」

マオ「いきなり現れて壮大な自分語り始めるのやめてもらえませんか? ハッキリ言って迷惑です!」

グレイ「テメエが言うな」

ドミニク「これは失礼、確かマオ君だったね。君もパラドレストを求めてここへ来たのだろうか?」

マオ「はい、そうですけど」

ドミニク「ならいがみ合う必要はないはずだ。言うなれば我々は同行の士なのだから」

マオ「ドウコウノシ？」

アール「簡単に言えば、『目的を同じとする仲間』と言う意味です」

マオ「仲間？え？私とドミニクさんって仲間だったの！？」

アール「解釈はマオ様に任せます」

マオ「ドミニクさん！あなたはパラドレストの存在を信じていますか？」

ドミニク「勿論だ、だからこそ私は今ここに居る」

マオ「やったーパラドレスト仲間が増えた！と言う事で 그레이さん、私達の依頼を受けて下さい！」

그레이「なんでだ、どうしてそうなった」

マオ「いや、1人分の依頼でダメなら2人分の依頼にしたら聞いてくれるかなって」

그레이「こいつマジか……」

マオ「おねがいます！！！」

ドミニク「観念したまえドクター・ 그레이。彼女、そう簡単に引き下がるタマでは無さそうだぞ」

그레이「……分かったよ」

マオ「ホントですか！？ありがとうございます！！！」

그레이「ただし条件がある、今から4の月4の日までの間に、俺が出す課題をクリア出来たら

依頼を受けてやる」

マオ「課題？」

그레이「アール」

アール「了解、DPP起動」

D P P ・ オルデйна洞窟

グレイ「A級危険区域オルデйна洞窟。ここで採れる希少鉱石を入手してくる事、それが条件だ」
マオ「A級危険区域！？なんでわざわざそんな危ないところに？」

グレイ「これくらいの課題をこなせないようなヤツの依頼は、例え幾ら金を積まれても
受ける気が起きねーからだ」

マオ「つまり力試してわけですね……分かりました、その課題受けて立ちます！」

ドミニク「ふむ、ドクター・グレイ。その力試しには私も含まれているのかな？」

グレイ「あたりめーだろ、どうするおぼっちゃん？こればかりは金で解決できる問題じゃねーぞ」
ドミニク「いや問題無い。ライラ、ミイナ、来たまえ！」

ライラ・ミイナ I N

ドミニク「ほら二人共、挨拶を」

ライラ「……ドミニク様の側近、ライラ」

ミイナ「同じくドミニク様の側近を務めております、ミイナと申します。よろしくお願い致します」

マオ「うわ見てアールくん、双子だよ双子！」

アール「ボクもホンモノは初めて見ました」

ドミニク「この二人は最近雇ったのだが中々に優秀でね、オルディナ洞窟には私の代理として彼女達に向かってもらう」

マオ「え、そんなのアリ!？」

ドミニク「課題の内容は鉱石を入手してくる事、その方法までは詳しく指定されていなかった。問題無いだろうドクター・グレイ？」

グレイ「かまわねえよ、そんなじゃとつとと…」

マオ「ちよつと待ったー!!！」

グレイ「声でけえよなんだよ」

マオ「向こうは二人居るのに、私だけ一人なのは不公平だと思います！」

ライラ「あ？」

ミイナ「えっ…ごめんなさい」

ドミニク「一理有るな、では君も今から誰か助っ人を用意するのかね?あまり時間の猶予は無いと思うが」

マオ「それなら大丈夫です。助っ人ならもう見つけてありますから！」

グレイ「見つけてある？」

マオ「はい!ね、アールくん？」

アール「…ボク？」

冒険スタート、ドット絵転換

2. 4の月2の日、オルディナ洞窟

マオ「いやー、意外と遠かったなオルディナ洞窟」

アール「1日費やして今が4の月2の日、帰りにもう1日かかると考えたら……」

ライラ「無駄口叩いる暇はねえって事だ、さっさと行くぞ」

ミイナ「ああ、待つてお姉ちゃん」

マオ「にしてもこの独特な雰囲気、流石はA級危険区域だね。これは何が起こるか分からないぞ」

アール「何だか楽しそうですねマオ様？」

マオ「そりゃ怖い気持ちも少しは有るけどさ、ワクワクの方が強いかな。『未知との遭遇を

楽しむべし!』それがトレジャーハンター・マオの信条なんだ！」

アール「マオ様の言う事少し分かる気がします。ボクも知らない事を知れると嬉しい気持ちに

なりますから」

マオ「お、気が合うねアールくん！てかマオ様はやめてよ、なんかすぐったいから」

アール「わかりました、ではマオさんとお呼びしますね」

マオ「うん、そうしてそうして！」

アール「マスター以外に様付けをしないのは初めてなので、なんだか照れます」

マオ「へえそうなんだ！っていうかグレイさんてさ、普段ムツツリだけど意外と……」

ライラ「無駄口叩くなつて言っただろ、遊びに来てるんじゃねーんだぞ」

二人「ごめんなさい……」

ライラ「まったく、なんでアタシがこんな奴らと……」

ミイナ「怒らないでお姉ちゃん、マオさん達だって悪気が有るわけじゃ……」

ライラ「うるさい、アタシに指図すんな」

ミイナ「……ごめんなさい」

マオ「……怖いなあのお姉ちゃん、妹ちゃんの方はいい子なのに双子って不思議」

ミイナ「あの、お姉ちゃんの事悪く思わないでください。任務の間はいつも気を張っているから少しピリピリしているだけなんです」

マオ「まあ確かに、ここに来るまでの道中も色々助けてもらったけど、もう少しフレンドリーでも良くない？せつかくチーム・ドウコウノシになれたのに」

アール「いつの間にかチーム名になっていたんですね」

ライラ「……少し開けたところに出たか」

マオ「そう言えばアールくん、希少鉱石ってどんな特徴があるの？」

アール「今回の目標、通称オルディナイト鉱石にはエメラルド色に光る特徴があるとされています」

マオ「エメラルド色か……よし頑張っって見つけるぞ〜」

ライラ「静かにしろ！」

マオ「ええ？今そこまでうるさくしたかな……」

ライラ「そうじゃない、何か聞こえる……」

マオ「ほんとだなにか聞こえる……声？」

アール「該当する音声データ無し、一般的なモンスターでは無いと思われます」

ミイナ「そう言えば、オルディナ洞窟には主（ヌシ）と呼ばれる凶暴なモンスターが居て、

A級危険区域に指定されているのはそのモンスターのせいだと聞いた事が有ります」

マオ「ミイナちゃんそういう情報は早く知りたかったなあ！」

ミイナ「ご、ごめんなさい！」

ライラ「声が近づいてくる……全員構えな……！」

フィリアスカの高笑いと共にビューティートリニティIN

フィリア「ア—ハッハッハッ！とうとう見つけたよ、トレジャーハンター・マオ！」

ジード「ここで会ったが100年目、覚悟しろってんだこんチキシヨウめ！」

カーバ「ちきしょーめー」

アール「新種の生物データを記録」

ミイナ「とりあえずヌシではないみたいです」

ライラ「おいマオ、がつつりお前の方に向かって喋ってたけど知り合い？」

マオ「……知らない、ぜんぜん知らない、これっぽっちも」

フィリア「何を言うんだい！宿命のライバルである我々の顔を忘れたなどとは言わせないよ！？」

ジード「そうだー！二度とそんな酷い事言うなー！傷つくからー！！」

カーバ「きずつくからー」

アール「傷ついちゃうそうですよマオさん」

マオ「あーもー！！なんでアンタ達がここに居るの！？」

フィリア「そこまで知りたいと言うなら教えてやるわ！でもその前に、お前たち例のアレ行くよ！」
二人「おう！（おー）」

フィリア「美貌の化身にしてこの世の美を全て身に纏う絶世の美女、フィリアスカ！」

ジード「雷光一闪、紫電の右腕ジード！！」

カーバ「すごいひだりうで、カーバ」

三人「我ら、3人揃って、ビューティートリニティ！！！（セリフバラバラで揃わない）」

アール「マオさんには面白い友達が居たんですね」

マオ「違うから！全然そんなじゃないから！！」

フィリア「宿命のライバルマオ！パラドレストを頂くのは私達ビューティートリニティだよ！」

ライラ「…お前らもパラドレストを？」

ジード「ああそうだ！フィリア姉さんの永遠の美という願いを叶える為、オレ達はパラドレストを
探し求め、その女マオとは過去何度にも渡って戦いを繰り返して来たんだ！」

ミイナ「そうなんですかマオさん？」

マオ「……まあ、すごく掻い摘んで言うとなんかそんな感じ」

フィリア「ドクター・グレイを利用する事は我々も考えてはいた。しかし急遽作戦を切り替えて

華麗にトークを盗み聞き、そしてこのオルディナ洞窟に先回りをしていたというわけさ」

ジード「流石フィリア姐さん！美人なだけじゃなくて頭もキレル！！ヒューヒュー！」

フィリア「よせやい」

アール「マオさん、あの人達なんだかギャグマンガのキャラクターみたいで楽しいです」
マオ「うんアールくん、今はその好奇心しまつておこうね」

カーバ「ちなみにあらかたこの洞窟内は探し終えましたが、希少鉱石は見つかりませんでした」
ライラ「なに？」

ジード「つまり！テメーらみーんな無駄足だったってワケだ！！」

フィリア「せっかくここまでたどり着いたのに残念だね〜！アーハッハハッ！！！」

アール「ということは、あの人達も無駄足踏んでますよね？」

ミイナ「ダメですよアールくん、ああいう人達に正論を言ったらダメなんです」

カーバ「何気に一番ヒドイこと言ってるなあの子」

巨大足音 S E

マオ「なに！？何の音！？」

アール「足音と推測、かなり巨大な生物の模様」

ミイナ「巨大生物ってまさか…！」

オルディナ主登場、咆哮 S E

マオ「あれがオルディナ洞窟のヌシ…？想像してたよりも全然ヤバそう！」

ミイナ「マオさん見てください、ヌシの体に……」

マオ「……まさかオルディナイト鉱石!？」

アール「肯定、オルディナイト鉱石はあのヌシを倒す事でしか入手出来ないとされています」
マオ「ウソでしょ!？」

ライラ「つてことはやるしかねえわけか……クソ!」

フィリア「アハハハハ! すっかりビビっちゃって情けないねえお前達!」

ライラ「なに!？」

フィリア「あんな奴、私達ビューティートリニティに掛ければチョイつてやってチョイよ」

ジード「オレ達の雄姿、その目に焼き付けやがれ!」

カーバ「……しようがないなあ」

アール「マオさん、あの方たちつてひよつとしてスゴイ強いのですか?」

マオ「いやあ、まあ……」

衝撃SE、3人やられ声と共に退場

ライラ「想像以上に使えなかつたな」

ミイナ「ぶ、無事でしようか?」

マオ「しぶとるのが取り柄みたいな連中だから大丈夫! それよりも次はこっちに来るよ!!」

アール「皆さんボクの後ろに隠れてください。バリアー、アクション!」

火炎SE、バリアーSE

ライラ「このパワー……そこいらのモンスターとは桁違いだな！」

マオ「あんな怪物やつつけるのはトレジャーハンターの仕事じゃないのに…… 그레이さんのアホー」

ミイナ「アールくん、大丈夫ですか」

アール「問題ありません。それよりもマオさん、ライラ様」

ライラ「あ？」

マオ「なに？」

アール「少しの間又シの注意を引き付けてもらえませんか？そしたら後はボクがなんとかします」

ライラ「なんとかって……勝算が有って言うてるのか？」

アール「もちろんです。ボクはドクター・ 그레이の最高傑作ですから」

マオ「分かった、信じるよアールくん！」

ライラ「あ、おい！」

マオ「やーいやーい！こつちだよーだ！！」

炎SE，マオ避けるリアクション

ミイナ「又シの標的がマオさんに移りました！ああ危ない！！」

ライラ「……おいお前、さっきの言葉嘘だったら承知しねえからな！！」

銃声SE、ライラ戦闘合流

マオ「ライラ！」

ライラ「よそ見してんじゃねえ、来るぞ！」

ミイナ「アールくん、私にも何か出来る事はありませんか？」

アール「それでは、ボクの背中にあるスイッチを押してもらえますか？」

ミイナ「スイッチ……これですね！（ポチッ）」

アール「アルティメットビーム、チャージスタンバイ」

ミイナ「え、ビームって……どうなってるのアールくん！？」

アール「十秒後に強力なビームが発射されます。ボクはエネルギーコントロールに精一杯なので

照準はミイナ様をお願いします」

ミイナ「そ、そんなこと急に言われても！？」

アール「発射5秒前、4、3、」

ミイナ「ああああ……ふ、二人とも避けてえええ……！！！」

アール「アルティメットビーム、発射」

ビームSE、主モンスター爆散

ライラ「な、なんだ今のは……」

マオ「ビームだ……ホンモノのビームだー!! 凄いやアールくん!!!」

アール「アルティメットビーム、出力30%で発射完了。目標消滅を確認」

ミイナ「いい、今ので30%? じゃあもし100%で撃つとしたら……」

アール「はい、雷雲くらい楽勝で吹き飛ばせます」

ミイナ「ええ!？」

マオ「二人とも見て見てー! コレ!!!」

アール「それは、オルディナイト鉱石のかけらですね」

マオ「あのビームでも完全には壊れなかったみたい、すごい石だねコレ」

ミイナ「ドクター・グレイはどうしてこの鉱石が欲しかったんでしょうか?」

アール「それは違いますよミイナ様」

ミイナ「え?」

アール「マスターは別に鉱石なんてどうでもよくて、最初から皆さんを不合格にするために

この課題を考えただと思います」

マオ「だからあんなバケモノと戦わせたんだ! くっそーあの性悪博士めえ……イテテ」

ライラ「目的のモンは手に入ったんだ、さっさと帰るぞ」

ミイナ「ちよつと待ってお姉ちゃん」

ライラ「あ?」

ミイナ「マオさん、さっきの戦闘でケガしましたよね。見せてください」

マオ「え? ああこんなのかすり傷だよ。平気平気」

ミイナ「ダメです！ちゃんと手当をさせてください」

マオ「は、はい…よろしくお願いします」

ライラ「ちっ…さっさと済ませろよ」

ミイナ「うん！」

マオ「まあ色々あったけど、何はともあれチーム・ドウコウノシ、これにて課題クリアー！」
アール「ぶい」

勝利のファンファーレ、ドット絵転換

3・4の月3の日、グレイの秘密基地

マオ「ただいま戻りましたー！！！」

ドミニク「おお、お帰り諸君。首尾はどうだったね」

マオ「じゃじゃーん！チーム・ドウコウノシ、見事オルデイナイト鉱石をゲットしてきましたー！！！」
ドミニク「そうかそうか良くやってくれた！」

マオ「どーですグレイさん、すごいでしょ！ホレホレ〜！！！」

グレイ「あぁ〜うぜえ！おいアール、テメエアレを使いやがったな」

アール「非常事態でしたので、仕方なく」

グレイ「少しは悪びれるポンコツが」

アール「クソ雑魚マスターが無理難題を出したのが悪いと思います」

グレイ「ああ!？」

マオ「とにかく!これで約束通り課題はクリア出来たので、私達の依頼受けてくれるんですよね?」

グレイ「……分かったよ」

マオ「じゃあじゃあ早速兵器作りに取り掛かってください!4の月4の日はもう明日なんですから」

グレイ「ばーか、んなもん必要ねえよ」

マオ「何言ってるんですか!?!この期に及んでまだイジワルするつもりなんですか!」

ミイナ「あのマオさん、兵器作りが必要無いのは本当だと思います」

マオ「へ?」

ライラ「お前も見ただろあん時のビーム」

マオ「ああー!そっかアールくんか!もうそれならそうと言ってくださいよ!」

グレイ「テメエが間髪入れずに突っかかって来たんだろうが」

ドミニク「私からも一つ報告だ、パラドレストへの移動手段としてシャドウファンク家専用の

飛空艇を手配した。兵器開発も問題無いようだしこれで全ての準備が整ったと言う訳だな」

マオ「凄いドミニクさん!ズルして引き籠ってたわけじゃなかったんですね!!」

ドミニク「うむそうなんだが……言い方」

マオ「それにしてもなんかお腹すいちゃったな。明日に向けて何か精の付くもの食べたいな」

グレイ「何だその露骨なアピールは。言っておくがウチには大した食材は置いてないぞ」

アール「マスターは食に対して無頓着ですからね、ボクも作り甲斐がなくて毎日困っています」

マオ「え、この家ではアールくんが料理作ってるの？」

アール「はい、料理だけでなく掃除洗濯整理整頓、全ての家事を担当しています」
マオ「やだ、お嫁に欲しいこの子」

ミイナ「アールくん、よかつたら私にも料理のお手伝いをさせてくれませんか？」

アール「ありがとうございますミイナ様。マスター」

グレイ「好きにしろ、俺は腹が膨れるならなんでもいい」

アール「はい、それじゃあミイナ様台所にご案内致します」

転換、お食事タイム、ドミニク・ライラOUT

マオ「うんまああ〜い！残り物の食材で作ったとは思えない。ねえグレイさん？」

グレイ「まあ、悪くは無いな」

マオ「ちやつかりおかわりまでしてる癖に、素直じゃないな〜」

アール「マスターがおかわりするところ初めて見ました。ミイナ様凄いです」

ミイナ「ありがとうアールくん」

マオ「あれ、そういえばライラとドミニクさんはどこ行ったの？」

ミイナ「お姉ちゃんは多分装備の手入れをしていると思います。ドミニク様は……」

グレイ「一旦家に帰ったぞ、こんな小汚い所に長居はしたくないんだろ〜」

マオ「ふ〜ん、お金持ちって色々大変なんですな〜」

ライラ I N

ミイナ 「お姉ちゃん、装備の手入れはもう良いの？」

ライラ 「ああ」

ミイナ 「じゃあすぐにお姉ちゃんの分も用意するね」

ライラ 「ん」

マオ 「なんか、姉妹って言うより冷めた夫婦みたいな会話だね」

アール 「姉妹にも色々な形が有るんですね、勉強になります」

マオ 「いやーそれにしてもホントにおいしいよミイナちゃん、特にこのスープの味は絶品だね！」

ミイナ 「ああ、そのスープはですね…」

ライラ 「おい」

ミイナ 「え？は、はい」

ライラ 「スープの味がいつもと違う、なんでだ」

ミイナ 「それは、皆さんお疲れだろうと思っただからいつもより塩を多めに…」

ライラ 「勝手なことしてんじゃねえよ！！」

ミイナ 「ひっ…ごめんなさい！」

マオ 「ちよつとライラ何怒ってるの？ミイナちゃん怯えてるじゃんか！」

ミイナ 「良いんですマオさん、私が悪いんです」

マオ 「何言ってるの！？今のはどう見たって…」

ライラ「それ、もういらなから。捨てるなりなんなり好きにしな」
ミイナ「…わかりました」

ライラOUT

マオ「なにあれちよー感じ悪い！ミイナちゃん、あんなの気にしなくていいからね？」

ミイナ「いえ、悪いのは私なんです。普段からお姉ちゃんには味を変えるなって言われてたのに…」

マオ「でも、それだって私達のためを思ってやってくれたんでしょ？」

ミイナ「そうですけど、それでも悪いのは私なんです」

マオ「ミイナちゃん…」

ミイナ「ごめんなさい、私も今日はもう休みますね」

グレイ「ミイナ」

ミイナ「え？」

グレイ「ごちそうさん、スープ美味かったぞ」

ミイナ「……ありがとうございます、おやすみなさい」

ミイナOUT

マオ「なんだ、グレイさんて優しい所もあるじゃないですか」

グレイ「何の話だ」

マオ「またまた照れちゃって、ホント素直じゃないですね〜！」

アール「マスターの属性に『ツンデレ』を追加」

グレイ「おいくだらねえことしてんじやねえぞ、今すぐ消せ」

アール「拒否します」

グレイ「テメェ！」

マオ「あはは！ホント二人って良いコンビですよね」

グレイ「はあ？何だ突然」

マオ「だってこうして見ていると博士と助手って言うより、仲の良い友達みたいに見えるから」

アール「……ともだち」

マオ「それにしても本当に凄いですよねアールくん。未だにロボットだって言うのが信じられない

です。ねえグレイさん、いったいどうやってアールくんを作り上げたんですか？」

グレイ「……教えてやってもいいが、それなりの覚悟はあるんだろうな？」

マオ「え？」

グレイ「なんせ基礎理論の説明だけで一か月は必要になるからな、全部を説明し終える頃には……」

マオ「さあー！明日はいよいよパラドレスト本番、私も万全を期すために寝るとしますかあー！

それじゃあ二人共、おやすみなさーい！！」

マオOUT

グレイ「ウソだよばーか」

アール「マスター」

グレイ「なんだ」

アール「どうしてあんなにもパラドレストの存在を否定していたんですか？本当は…」

グレイ「どんな願いも叶うなんて言うのは都合の良い幻想だ、そんな物に縋り続けていたらやがてロクでもない事が起きるに決まっている」

アール「つまり、マオさんを危ない目に合わせたくなかったって事ですか？」

グレイ「何故そうなる」

アール「でも、マオさんの事を気に入っているのは本当ですよ？ボクには分かります」

グレイ「勝手にほざいてろ、俺はもう寝るぞ」

アール「マスター」

グレイ「今度は何だ」

アール「ボクを作り出したのはマスターですよね？」

グレイ「…どう考えるかはテメエの勝手だ」

アール「はい、じゃあこれからも勝手にドクター・グレイの最高傑作を名乗らせてもらいますね」

グレイ「凶に乗るな、ポンコツが」

アール「えへへ」

ブル転、夜のSE

ジード「へつくしよん！」

フリーア「こらジード！大きな音を出したらバレちまうだろうが！」

ジード「すいませんでした！！！」

カーバ「声がかい、そういうお約束のボケもいらないつす」

ジード「すいませんでした！！！！（超小声）」

フリーア「オルデйна洞窟では後れを取ったけど、勝負はこれからよ。今に見てなさいクソガキ共」
3人「フフフフフフッ………」

4. 4の月4の日、シャドウフアングジェット

マオ「すごいすごい！メチャクチャ早く飛びますねこの飛空艇！」

ドミニク「ハハハ！この日の為に最新鋭のチューンナップを施したからな、これがお金の力だ！」

ミイナ「みなさん、もう少しで雷雲地帯に到着します」

マオ「いよいよか、ドキドキするなあ………」

グレイ「アール、準備は良いか」

アール（声）「はい、アルティメットビーム最大出力でスタンバイ完了です」

グレイ「よし、甲板に待機しているアールの照準を、遠隔操作出来るように改造しておいた」

マオ「え？いつの間にかそんなことを！？」

グレイ「さつき」

マオ「さつきて」

グレイ「と言う事だから照準はテメエに任せただぞライラ」

ライラ「分かつてる」

ミイナ「お姉ちゃん、頑張つてね」

ライラ「余計な事言つてないで操縦に集中しな」

ミイナ「…ごめんなさい」

マオ「ちよつとドミニクさん、あの二人の気まづい感じ何とかしてくださいよ。雇い主でしょ？」
ドミニク「あの二人はいつもあんな感じだぞ、まあ年頃の娘と言うのは色々気難しいものさハハ！」
マオ「ああもう、ドミニクさんのバ金持ち！」

衝撃S E、一同リアクション

ドミニク「な、なにをやっているんだミイナ！しっかり操縦しないか！！」

ミイナ「すみません！でも気流の乱れが酷くて…！」

マオ「つていつの間にか雷雲地帯に…ライラまだ撃てないの！？」

ライラ「有効射程までまだ距離が有る、今撃つわけにはいかない」

マオ「けどこのままじゃ船の方が保たないんじゃないの！？」

グレイ「しかたねえな。アール、フルバーストモードだ」

アール「了解、アルティメットビーム・フルバーストモード！」

ライラ「有効射程が伸びた！？これなら撃てるぞ！」

マオ「な、なんだかよく分かんないけどやっちやえアールくん！！！」

アール「出力150%、アルティメットビーム発射」

ビームSE、雷雲消滅

マオ「や、やったの？」

ミイナ「雷雲の消滅を確認しました……その先に謎の光源体を発見！！」

ドミニク「まさか……」

マオ「パラドレストだ……間違いない絶対そうだよ！！」

グレイ「あれが……パラドレスト」

衝撃SE、一同リアクション

ドミニク「な、なんだ！？」

ミイナ「あの光源体を中心として、とてつもない引力が発生しています！」

マオ「なにそれ？一体どうなってるの！？」

グレイ「マズイ、吸い込まれるぞ！！」

全員「うわあああああ！！！！！！！！！！」

5. パラドレスト パラドレストBGM, 明転

御使い「はい、と言う訳でやって参りました『パラドレスト・チャレンジ』のお時間です。

司会進行はワタクシ神の御使いがお送り致します！さあ今回も様々な顔ぶれが危険を顧みずに参加してくださいました。それではご紹介致しますよう、この方々です！！」

全員「……………」

御使い「おやおや今回のお客様方は随分シャイな人が多いみたいですね。でも大丈夫！

パラドレストはどんな方でもお楽しみ頂ける非常にアメイジングな空間となっております」
全員「……………」

御使い「それじゃあハイそこのアナタ！皆さんを代表して何かコメントをお願い致します！！」

マオ「え、いやその……思ってたのと違うなーって」

御使い「と言うと？」

マオ「伝説のお宝って言うから、もつとこうスゴイ神々しい雰囲気想像してたんですけど…………」

御使い「神々しいでしょ？バリバリに神々しいでしょ？」

マオ「だからその…………」

グレイ「うさんくせーんだよ、何よりもテメエの存在がな」

御使い「うさんくさい！？こんなにもピュアなボクちゃんを捕まえてうさんくさいですって！？

そうですかそうですかそれはどうもありがとうゴザイマス！」

マオ「え、喜んでる！？」

御使い「あんなにも思いやりやデリカシーも無くストレートな感想を頂けたのは初めてですから、ある意味嬉しくなっちゃうんでゴザイマス」

アール「褒められてますよマスター」

グレイ「どこがだ」

御使い「しかし、信用を欠いたままではこれからの進行に差し支えますからね……ここらで一発かましておきましようか!!」

マオ「い、一体何を!？」

御使い「我が神、ガブリエルーサンが与えた奇跡の恩恵、その一端をお送り致しましょう」

絵・VTR

字幕「パラドレストにお願いを叶えてもらった感想は？」

チャラ男「一か八かで『女の子にモテたい』ってお願いしたら、その直後に会う女の子みんなに

告白されちゃって……今じゃ体が幾つ有っても足りないっすよ!」

字幕「パラドレストにお願いを叶えてもらった感想は？」

美魔女「私は長年悩んでいたシミとそばかすが、パラドレストの力でもうキレイさっぱり!

今度お願いを叶えてもらうならブランドのバッグを頼んじやおうかしら!」

字幕「パラドレストにお願いを叶えてもらった感想は？」

オヤジ「離婚して家を出て行った妻と娘とやり直すことが出来ました。ありがとうございますパラドレスト!」

御使い「以上、実際にお願いを叶えてもらった人達によるコメント特集でした！どうです、

これで諸々信じる気になったでしょう？」

グレイ「いや、そんなわけ……」

ドミニク「素晴らしい！これぞ正しく伝説のお宝と呼ばれるにふさわしい力だ！！」

グレイ「え！？」

マオ「私、本当にパラドレストに辿り着いたんだ……！」

アール「マオさんも信じ切ってるみたいですね」

グレイ「あいつさつきまでこっち側だったろ……なんて切り替えの早い奴なんだ」

御使い「信じて頂けたようで何よりです！それでは改めまして、ルール説明に入らせて頂きます」

マオ「ルール？」

御使い「今からヨードンでスタートして頂き幾つかの試練を乗り越えた後、最深部に位置する

ゴール地点に最初に辿り着いた方のみ、お願いを叶える権利が与えられマス」

ドミニク「なに、お願いを叶えられるのはこの中の一人だけなのか？」

御使い「はい」

マオ「え、でも10年前の星降りの夜の時は世界中の人のお願いが叶ったって」

御使い「あれは……大変特別な事例でして、話すと長くなるのですが……」

ドミニク「細かい話はどうでもいい！本当に、願いを叶えられるのは一人だけなのだな？」

御使い「ええ、それこそがパラドレストの唯一にして絶対のルールです」

ドミニク「そうか、ならば仕方あるまいな」

マオ「ドミニクさん？」

ドミニク「冥界より来たりて彼の者を縛り付けよ……闇の堅牢！！」

魔法SE、魔法陣に捕まるグレイ・マオ・アール

マオ「わわ！なにこれ動けない！？」

アール「これは……魔法陣？」

ドミニク「ご名答、シャドウファンク家は代々続く魔術の家系。今発動したのは術式の中に居る対象者をその場に縛り付ける魔法だ」

グレイ「ドミニク、テメエ何の真似だ！！」

ドミニク「ここまでの案内ご苦労だったなドクター・グレイ、君の役目はこれにて終了だ」

グレイ「なんだと……！」

マオ「ドミニクさん、私達仲間じゃ……ドウコウノシじやなかったんですか！？」

ドミニク「君にも感謝しているよマオ君、利用させてくれてありがとう」

マオ「なっ……騙したなこのバ金持ちい！！」

ドミニク「負け犬の遠吠え実に心地良い！！では御使い殿、スタートの合図を頼む」

御使い「ムフフフ、さっそく面白い展開になってまいりましたねえ。それでは皆さんゴール

目指して頑張ってください。ヨオオイドオオン！！！！」

ドミニク「さあ行くぞ、ついて来いライラミイナ！」

御使い・ドミニクOUT

マオ「ねえライラ、ミイナちゃん、二人も私達の事を騙してたの…？」

ミイナ「それは…」

ライラ「お前らは大人しくここに居ろ、もし追ってきたらその時は容赦しない…：行くぞ」

ライラ・ミイナOUT

マオ「ちよつと待つてよ！ねえつてば！！」

グレイ「アール、どうだ？」

アール「メモリーの情報によると術の効果は1時間で切れるみたいです。それまで待つしか」

マオ「そんなあ…：」

グレイ「…：なんだ？何か聞こえるな…：声？」

アール「該当するデータが一件、これは…」

トリニティIN

フィリア「随分無様な姿だねえ、ええマオ？」

マオ「ビューティートリニティ！何でアンタ達がここに！？」

ジード「ヘッ！オレ様達に掛ければ飛空艇に忍び込むなんて朝飯前なんだよ！」

カーバ「漁夫の利作戦大成功」

グレイ「なんだ？あの頭の悪そうな連中は」

アール「オルディナ洞窟で会った面白い人達です。確か名前は……」

フィリア「美貌の化身にしてこの世の美を全て身に纏う絶世の美女、フィリアスカ！！」

ジード「雷光一闪、紫電の右腕ジード！！」

カーバ「すごいひだりうで、カーバ」

三人「我ら、3人揃っ……」

グレイ「アール」

アール「10%アルティメットビーム」

ビームSE、3人悲鳴

アール「身動きは出来ませんが、ビームは撃てましたマスター」

グレイ「ああ、だが魔法陣は何ともなってるねえな。さてどうするか」

フィリア「お前たちい！人が名乗りを上げている最中に攻撃するなんて、卑怯極まりないわよ！」

グレイ「知るか、バカに付き合ってるほど暇じゃない」

ジード「ふざけやがって！死ぬとこだったんだぞー！」

カーバ「ていかなんで死んでないんですかね」

アール「そうだマスター、良い事思いつきました」

グレイ「なんだ？」

アール「ゴニョゴニョ」

ジード「フィリア姐さん、アイツら今度はオレらをシカトし始めましたよ！！」

フィリア「なんて憎たらしいいい、絶対に許さないよマオ！！」

マオ「今私関係なかったよね！？」

グレイ「おうお前ら、悔しかったら反撃して来やがれ」

アール「おしーりペンペンです」

カーバ「わあー見え透いた挑発だあ、そんなのにひっかかる奴いるわけ……」

フィリア「行くぞ野郎どもおおお！！！！」

ジード「よつしやあああ！！！！」

カーバ「いましたねくくく」

攻撃SE、魔法陣パリーン

フィリア「ん、なんだい今のパリーンて？」

グレイ「闇の堅牢は外からの衝撃に弱い、情報通りだったなアール」

アール「ぶい」

マオ「ありがとうフィリアスカ！助かったよ！！」

フィリア「え、あ、どうも」

グレイ「さて、ドミニクのヤローには受けた借りをしつかり返してやらねーとな」
アール「ボクもちよつとだけおこです」

フィリア「あの一」

マオ「よーしそれじゃ改めましてこの3人で、ゴール目指して頑張りましょー！」

グレイ「なんでテメーが仕切ってたんだよ」

マオ「良いじゃないですか細かい事は気にしない！さあレッツゴー！！」

3人OUT

カーバ「すごい、僕らの事なんてまるで眼中になかったっすね」

ジード「ど、どうしますフィリア姐さん？」

フィリア「……決まってるだろ、一番乗りでお宝を頂いてやるのさ！行くよお前たちいい！！」

ジード「よつしやあああ！！カーバ（お一）」

トリニティOUT，御使いIN

御使い「今宵の参加者は以上9名、彼らがここに集ったのは偶然かはたまた必然か……」

それでは早速、第一の試練・バトルタイム行ってみよおー！！！！」

6、試練 絵・それぞれの戦闘シーン

御使い「おほほ意外とやりますねえ……それでは続いて、第二の試練・シヤツフルターイム!!!」

シヤツフルSE

御使い「ここより先は迷宮の試練。絡み合う運命はどんな物語を紡ぐのか、楽しませて貰いますよ」

御使いOUT、絵・パラドレスト内部

マオ「いや〜まさかいきなりバトル展開になるとは、流石だね。パラドレスト！」

グレイ「ハア…ハア……」

アール「大丈夫ですか、クソ雑魚マスター」

グレイ「黙れ……このボン…ゲホゲホ！」

マオ「もおくだらしないですよグレイさん！これを機に引きこもり生活やめましょーね」

グレイ「……クソが」

アール「それにしても、さつきから何か変です」

マオ「どうしたのアールくん？」

アール「さつきからずっと景色が変わらないと言うか、同じ場所をグルグル歩いていると言うか」

マオ「確かに……て言うか勢いのままにここまで来ちゃったけど、今私達って何処に居るんだろう？」
アール「見ますか？」

マオ「え、何を？」

アール「DPP起動」

DPP・パラドレスト

マオ「なにこれ!？」

アール「引きずり込まれる直前に記録したパラドレストの外観映像です。どうやらボク達が
今いるのは、この巨大な球体型の空間の様です」

マオ「……ナルホド」

グレイ「非現実極まりねえ場所だな、胸糞ワリイ」

アール「けど引き返せる保証も無いですし、今はゴールを目指して進むのが賢明だと思います」
グレイ「分かってるよ」

カーバIN

カーバ「兄者ー！フィリア様ー！！ダメだ、完全にはぐれてしまった……あ」

アール「あ、ビューティートリニティの」

マオ「えつと……ジード？」

カーバ「カーバです」

マオ「わぁ食い気味……ごめんごめん」

カーバ「あの、兄者たちを見かけませんでしたか？」

マオ「え、いや見てないけど」

カーバ「そうですか……まあ、殺しても死なないような人達だから大丈夫だとは思うんですけど」

アール「お二人の事、心配なんですな」

カーバ「いや、フィリア様の事は正直そこまで」

グレイ「忠誠心ゼロだな」

マオ「前から思ってたけど、あのトリオでキミだけ明らかにノリが違うよね？なんで？」

カーバ「……話すと長くなるんですが」

アール「お手伝いします」

D P P ・ 回想シーン

カーバ「10年前の僕は、今よりかなりヤンチャをしていました。『テメエ舐めてんじゃねえぞ

コノヤロウ！』こんな感じに」

マオ「わぁ、スゴイヤンチャだ」

グレイ「絵に描いたようなヤンチャだな」

カーバ「逆に10年前の兄者はとても真面目で、正義感に溢れた優等生でした」

ジード『やめるんだカーバ、争いからは何も生まれはしない！』

マオ「わあ、スゴイまともな事喋ってる」

グレイ「同一人物とは思えんな」

カーバ「すれ違いを続ける僕達兄弟に転機が訪れたのは、10年前の星降りの夜の日でした」
マオ「え？」

ジード『カーバ、本当に地元で有名なヤンチャチームとケンカしに行くつもりなのか？』

カーバ『うるせえな、テメエには関係ねえだろ』

ジード『関係ないはずないだろ！お前は僕の大事な弟なんだぞ！！』

カーバ『いい子ちゃんぶりやがって、いいからそごどけよ！』

ジード『うっ！』

カーバ「無謀なケンカに挑もうとしていた僕を兄者は必死で止めようとした、そんな兄者を殴り飛ばしたその時でした」

パラドレストSE

カーバ「突然眩しい光に包まれて、気が付くとさっきまで倒れていた兄者が立ち上がっていたんす」

ジード『……待て』

カーバ『しつけえな、もう一発ぶん殴……』

ジード『待って言って言ってるんだろ？が舐めてんじやねえぞあああん！？』

カーバ「兄者が、僕よりもヤンチャになった瞬間でした」

マオ「え、なんで？何が起こったの！？」

カーバ「恐らく、僕を止めたいと言う兄者のお願いが叶った結果なんだと思います」

アール「弟様よりもケンカが強くなる事で、兄者様のお願いが叶えられたってことなんでしょうか」

カーバ「いや違うんす、とてつもなくヤンチャになった兄者の姿を見て僕は……引きました」

マオ「ん？」

カーバ「自分よりもヤンチャな人を初めて第三者視点で見て、凄いやだなって思って、

とても冷ややかな感情が芽生えたんす」

アール「なるほど、それでケンカには行かずに済んだんですね。よかった」

グレイ「喜んでいいのかは微妙だけどな」

カーバ「それから兄者は順調に道を踏み外していき、気が付けばフィリア様の舎弟となりました。

そんな兄者を放つてはおけず色々あった結果、ビューティートリニティは結成されたんす」

マオ「あ、そうか！元々はその話だったんだ！」

アール「危うく本題を忘れるところでしたね」

カーバ「僕のせいで兄者は変わってしまった、だから僕は兄者を元の兄者に戻してあげたいんです」

マオ「そつかあ、全てはお兄ちゃんの為だったんだね……泣かせるなあ兄弟愛！」

グレイ「泣く要素どこにあったんだ」

カーバ「はっ、こんなことしてる場合じゃない！兄者を探さないと……あにじや〜〜」

カーバOUT

アール「人にはそれぞれ歴史が有るんですね、勉強になります」
マオ「さて、じゃあそろそろ私達も……」

ジードIN

ジード「チクシヨウダメだ、完全にはぐれて……あ」

アール「あ、ビューティートリニテイの」

マオ「えつと……カーバ？」

ジード「ジードだよ！」

マオ「ごめんて！」

グレイ「弟の方なら、さつきあっちの方に走って行ったぞ」

ジード「マジか！？すまねえ恩に着るぜ！！」

ジードOUT

アール「珍しく親切ですねマスター」

グレイ「これ以上あんな脇役に時間を割きたくないだけだ。早くドミニク達を追うぞ」

シャッフルSE、グレイ達OUT、ドミニクIN、遅れてフィリアIN

ドミニク「くっ…ライラとミイナは一体何処へ行ったんだ…まったく使えない奴らめ！」
フィリア「ジード…カーバ…出ておいでえ…出て来てくれたらフィリア姐様特性の…」
ドミニク&「あっ…」

御使いIN

御使い「瞬間、男は思った。何と美しい…正しく絶世の美女だと！！」

御使い「瞬間、女は思った。匂うでえ…コイツから金の匂いがプンプンしてくるでえ…と」
御使い「男と女、愛と金、欲望渦巻くスペクタクルショーの開幕です」

御使いOUT

ドミニク「お嬢さん、こんな場所で一体何を？」

フィリア「あ、その…それがワタクシにも良く分からなくてああ！頭がクラクラする…」

ドミニク「しつかりしたまえ！気を確かに！！」

フィリア「ありがとうお優しいお方。貴方のお名前は？」

ドミニク「私の名はドミニク・シャドウファンングだ。君の名は？」

フィリア 「ワタクシはフィリアスカと申します。ドミニク様」

ドミニク 「フィリアスカ……おおなんと可憐な名だ！」

フィリア 「ちよろいなコイツ」

ドミニク 「なにか？」

フィリア 「いえ別に、それよりもドミニク様はどうしてこの場所に？」

ドミニク 「私の家は代々続く魔術の名家だね。実家の書庫に保管されていた古い文献から

パラドレストの事を調べ上げここまでやって来たのだ」

フィリア 「そうだったのですね」

ドミニク 「私も君の事をもっと知りたい！フィリアスカ、君は一体何者なんだ？」

フィリア 「ああ、ワタクシはビューティートリニティの頭を……」

ドミニク 「え？」

フィリア 「じゃあなくて、ビューティート……リニック的な？トリートメント的なお仕事を少々」

ドミニク 「なるほど美容関係の仕事をしているのか。可憐な君にピツタリじゃないか」

フィリア 「ありがとうございます。オホホホ」

ドミニク 「しかし、なぜこんな場所に居るのだ？偶然辿り着けるような場所とは思えないが……」

フィリア 「それは………実は、生き別れになった弟達を探していて」

ドミニク 「え？」

フィリア 「あああジードとカーバ、ドジでバカだけれど愛おしい弟達……一体どこへオヨヨヨ」

ドミニク 「そうか、弟達を探すためにパラドレストをお願いを……なんていじらしい話なんだ！」

フィリア「……まあ、ウソは言つて無い」

ドミニク「よし分かった！私がお願いを叶えた暁には、弟達を捜すのを手伝おうではないか！」
フィリア「……本当ですか？」

ドミニク「ああ本当だとも、約束しよう！」

フィリア「ありがとうございますドミニク様！ワタクシ、貴方に出会えて幸せですわ！！」

ドミニク「ハッハッハッ何という僥倖！！やはりパドレストは私の望むものを全て与えて

くれるのだな！こうしてはおられん！二人の未来の為に、行くぞフィリアスカよ！」
フィリア「はい！……まあ、せいぜい利用させてもらおうわよ。お坊ちやま」

ドミニクOUT、セリフ終わりでフィリアOUT、御使いIN、遅れてミイナIN

御使い「予期せぬ出会いがまた新たな物語を紡いでいく……実に面白い。さて次は……おや？

君一人ですか、どうやら道に迷ってしまったようですね」

ミイナ「御使いさん」

御使い「しかし君の心からは迷いを感じない、この先に何が起ころうとも自分がどうあるべきかを既に決めているご様子だ」

ミイナ「知っているんですか、私の事を？」

御使い「真実も所詮は無数にある答えの一つでしかありません、大切なのはその中から自分だけの答えを見つけ出す事なのです」

ミイナ「自分だけの答え……」

御使い「どのような答えに辿り着くのか楽しみにしていますよ。パラドレストに導かれし者よ」

シャツフルSE、御使いOUT，ライライN

ライライ「こんな所に居やがったのか」

ミイナ「お姉ちゃん、良かった無事だったんだね」

ライライ「余計な気を使ってんじゃないやねえよ、お前は自分の役目を果たす事だけ考えてればいいんだ」
ミイナ「……はい」

ジード・カーバ、時間差でIN

ジード「カーバ！どこだーカーバ！！」

カーバ「兄者！」

ジード「おおカーバ！良かった無事だったか！どこかケガとかしてねえか！？」

カーバ「してない」

ジード「左腕は？疼かねえか！？」

カーバ「うずかない」

ジード「そうかそうか！いつも通りで安心したぞお！」

カーバ「兄者こそ、ケガとかしてないすか？」

ジード「してねえぞ！」

カーバ「右腕は？」

ジード「ウズウズしてるぞお！！」

カーバ「よかったいつもどおりだ」

ジード「さーて後はフィリア姐さんだが……ん？」

ライラ「お前らも来てやがったのか」

ジード「あつたりめえよ！ビューティートリニティ舐めんなコラ！」

カーバ「あんた達も仲間とはぐれたみたいっすね」

ライラ「……仲間？いねえよそんなもん」

カーバ「え、だって……」

ジード「やいやいテメーら！オレはなあ、テメーらにもう一度会ったら言いたい事が有ったんだ！」

ライラ「あ？」

カーバ「兄者？」

ジード「初めて見た時からずっと思っていたが……テメーらオレ達とキャラ被ってんだよお！！」

カーバ「………は？」

ジード「いいか、双子って言うのはなあ本来かなり目立つポジションのはずだ！なのにその双子が被るって！しかも方や美人姉妹で方やドジバカ兄弟……って誰がドジバカ兄弟だ！

舐めてんじゃねえぞコノヤロー……！」

カーバ「兄者落ち着いて、キレたり褒めたり挙句ノリツツコミしちやつてるからリアクションの正解が分からない」

ライラ「……くつくつくつ、アーハツハツハ……!!」

ミイナ「お姉ちゃん？」

ジード「な、なに笑ってんだコラあ！」

ライラ「……キャラが被ってるか。そうだなあ、本当にそうだったらどれほど良かった事か」

ジード「テメー何を言ってる……」

ライラ「おいアニキの方。お前もし、その弟が今ここで死んだらどうする？」

ジード「な、なにをいきなり縁起でもねえ……」

ライラ「いいから答えろ」

ジード「それは……その……パラドレストに、カーバを助けてくれってお願いする」

ライラ「じゃあ、そうして蘇った弟がホンモノじゃなかったとしたらどうする？」

ジード「ホンモノ？」

ライラ「姿形は一緒でもホンモノでは無いんだ。そんな不完全な弟を与えられたら一体どうする？」

カーバ「あんたさつきから何を……」

ライラ「お前には聞いてねえよ！ほら、答えろよ」

ジード「いやよく分かんねえけど、ちよつとくらい変わったってカーバはカーバだ。オレの大事な弟だつて事に変わりはない。だからホンモノとかニセモノとか、ましてや不完全だなんて

ヒデー事思う訳ねーだろ！」

カーバ「兄者……」

ライラ「……やっぱ分かるわけねえか、アタシの気持ちなんて誰にも」

ジード「つかなんなんだよこの質問、一体何が知りたかったんだ？」

ライラ「もういい、つまらん問答に付き合わせて悪かったな。お札にアタシの答えを

聞かせてやるよ……アタシの答えはな」

ジード「え？」

カーバ「兄者！！！」

銃声 S E 2 発、暗転

7、星降りの夜

グレイ「……クソっ……クソっ」

アール「合計43回目の悪態、限界ですわね」

マオ「しかたない、じゃあここで一旦休憩にしましょう。大丈夫ですかグレイさん？」

グレイ「……大丈夫に……決まってるだろ」

マオ「強がるより先に息を整えてください。でないといつまで経ってもドミニクさん達に

追いつけないですよ」

アール「マオさん、ボクだけでも周辺の様子を確認してきましようか？」

マオ「ダメだよアールくん、『団体行動の時休憩はなるべくみんなと一緒に取るべし』

トレジャーハンター・マオの信条の一つです」

アール「なるほど、勉強になります」

マオ「なーんて偉そうに言っただけ、お父さんの受け売りなんだコレ」

アール「お父様の？」

マオ「お父さんは色々な信条を持っていてね、中でも一番大切にしていたのが『宝を手に入れる事

よりも無事に家に帰る事を優先すべし！』だからアールくんにも無理してほしくないんだ」

アール「そうだったんですね、心配してくれてありがとうございます」

マオ「いえいえ、どういたしまして」

グレイ「けど、そんな信条を持っていた親父が何故10年も帰って来ていないんだ？」

マオ「……それは」

グレイ「そもそもテメエはパラドレストに行きたいとは言っていたが、どんな願いを叶えたいかは

一言も言っていないかった。ドミニクやあの3バカトリオみたいな欲望塗れの人種にも

見えねえ。つまりテメエがここに来た理由は一つしか考えられねえ」

マオ「気付いていたんですね、いやー流石はグレイさんだなー！」

アール「マオさん……」

マオ「私はお父さんの行方を知る為にパラドレストを探していました。パラドレストに辿り着けば

きっと何かが分かるかと信じていたんです。グレイさん、アールくん、巻き込んでごめんなさい」

グレイ「……らしくねえことしてんじゃねーよ」

マオ「え？」

アール「そうですよマオさん、ボクもマスターもマオさんが好きだから協力しているんです。

今更頭下げたりなんかしないでください」

グレイ「おい、何勝手に一括りにしてんだテメエ」

アール「素直になれないマスターの為に代弁してあげたんです。感謝してください」

グレイ「テメエ！」

マオ「……………あははははは！そうだよね、今更だよねホント。うん、確かに私らしくなかったな！」

アール「はい、そうやって笑っている方がマオさんらしいと思います」

マオ「ありがとうアールくん、グレイさんも。よし、それじゃあゴール目指して突っ走るぞお！！」

御使い「おめでとうございまーす！第二の試練クリアでございまーす！！」

マオ「うわあびつくりした！！」

グレイ「御使い……！」

御使い「心の中の迷いを払い明確な強い意志を持つ、第二の試練が貸した課題をお三方は見事に

達成されました。なので次はいよいよ最終試練・真実の試練に挑んで頂きます！！」

アール「真実の試練？」

御使い「第一の試練では肉体の強さを、第二の試練では心の強さを計りました。そうパラドレスト

とは、お願いを叶える為に人間が苦難を乗り越え成長していくためのプログラムとして、
我が神ガブリエル・サンが作り出したものだったのです……！！」

マオ「そ、そうだったんですか！？」

御使い「とまあ、さつき3秒で考えた設定は置いて」

グレイ「おい」

御使い「最初に話しましたね、パラドレストは本来一人のお願いしか叶える事が出来ない」と

マオ「そうそう！だからドミニクさんが卑怯な手を……ああ！思い出したらまた腹立ってきた！」

御使い「ですが10年前そのルールを覆す出来事が起こった。それこそが……」

グレイ「星降りの夜」

御使い「その通りです。知りたくはありませんか？あの日、一体何が起きたのかを」

アール「それを知る事が、最終試験なのですか？」

御使い「真実を知る事は時に痛みを伴う事もあります。その覚悟が皆様にはお有りですか？」

マオ「……教えてください御使いさん、星降りの夜の真実を」

御使い「畏まりました……遡る事10年前、このパラドレストに一人の男が辿り着きました」

マオ「男……それってどんな人でした？名前は！？」

御使い「さあ、お名前までは伺っておりませんでしたので。ですが確か……」

御使い（父）「あーあー、うん。確かこんな感じの声だったと思います」

マオ「この声……お父さんの声だ……！」

アール「本当ですか？」

マオ「間違いないよ！そっか、お父さんはパラドレストに辿り着いていたんだ……！」

御使い「その男はたった一人でパラドレストに辿り着き、数々の試験も一人で乗り越えて行き

ました。満身創痍になりながらも男はなんとかゴールへと辿り着いたので」

アール「一人でゴールまで……マオさんのお父さんはスゴイ方だったんですね」

マオ「それで？」

御使い「私は男に問いました。あなたの叶えたいお願いは何なのかと。すると男はこう答えました「父「俺には世界一カワイイ娘が居てな……その娘が言ったんだ。『世界中の人達のお願いを叶えて欲しい』って、だから俺は願う。今この瞬間、願いを捧げる全ての人のお願いを叶えて欲しい！」

御使い「私は、人間は皆己の欲望を満たす事だけを考える生き物だと思っていました、目の前の男は違っていた。真剣に心の底から、誰かの願いを叶える為に叫んでいたのです」

グレイ「筋金入りのバカだなソイツは」

アール「でも、なんだかマオさんのお父様って感じがします」

マオ「お父さんが、私のお願いを」

御使い「男の願いは聞き届けられ、パラドレストの力は世界中へと飛散していきました。

そして多くの人々がお願いを叶える事が出来たのです。名も知らぬ男のお陰でね」

グレイ「それが星降りの夜の真実か」

御使い「人間と言うのは時に神が予想もしえない行動に出る、彼は実に愉快で刺激的な人物でした」
マオ「……それで、その男の人はどうなったんですか？」

御使い「パラドレストの光が世界中に降り注ぐ最中、男は笑みを浮かべながらこう口にしました」
父「マオ、お前のお願い叶ったぞ……父さんやっつと、お前に幸せを……」

御使い「その言葉は最後まで紡がれる事は無く、男は静かに息を引き取りました」

アール「そんな！」

御使い「娘の願いを叶えたい一心が男の命を繋ぎ止めていたのでしよう。それが果たされた事で彼はその生涯を終えたのです」

マオ「そっか…お父さん死んじゃってたんだ。無事に帰るっていつも言ってたのにウソつきだなあ」
アール「マオさん…」

マオ「あれ？おかしいな…なんで」

泣きじゃくるマオ。黙って見つめるグレイと言葉の出ないアール

御使い「水を差す様で申し訳ございませんが、真実の試練はまだ途中でございます」

マオ「え？」

御使い「星降りの夜が一体世界にどんな影響を与えたのか、それを今から知って頂きます」

マオ「どんなつて…みんな幸せになっただんですよね？だってお願いが叶ったんだから」

御使い「みんなと言うのは語弊がありますね、彼の者が願ったのは『その瞬間に願いを捧げる者』が対象だったのですから」

マオ「そんな…」

御使い「言葉や想いという物は繊細で難解なものです。その歯車が掛け違った事で何が起きたのか、どうぞその目でお確かめください」

パレードラストSE

御使い「まずは星降りの夜に選ばれる事無く、内なる欲望を更に大きく募らせた者達」

ドミニク・フィリアIN

ドミニク「何故だ、世界中の人間が願いを叶えたのに何故私には！？認めん、断じて認めんぞ！

この私に、ドミニク・シャドウファンクに手に入らないものなど有ってはならないのだ！」
フィリア「星降りの夜？みんなが幸せに？くだらない！有象無象と同じレベルの幸福に何の意味が

有る！私は手に入れて見せる！永久の美を！唯一無二の願いを叶えてやるのさ！！」
御使い「願いの果てに変わり果てた者と、後悔と懺悔を抱き続ける者」

パラドレストSE、ドミニク・フィリアOUT、ジード・カーバIN

ジード「真面目に生きるなんてカッコ悪い！男に生まれたからにはスリリングでダーティーな

生き方を目指さねえとなあ！！」

カーバ「……やめてくれ、兄者」

ジード「舐めてんじやねえぞコラ！いいか、オレ様に逆らうヤツはこの封印されし右腕の力で……」
カーバ「もうやめてよ！兄さん！！！！」

御使い「願いによって救いたかった命と、願いによって生まれた命、その差異に苦しむ者」

パラドレストSE、ジード・カーバOUT、ライラ・ミイナIN

ミイナ「ごめんねお姉ちゃん……私……もう……」

ライラ「ダメだよミイナ！死んじゃダメ！アタシを一人にしないで！！」

ミイナ「お姉ちゃん……だいすき……」

ライラ「ミイナ？いやだよこんなの！お願い神様アタシからミイナを奪わないで！お願いだから！」

ミイナ「……っ……」

ライラ「ミイナ……良かった生き返った！神様がアタシのお願いを叶えてくれたんだ！！！」

ミイナ「……だれ？」

ライラ「……え？」

ライラ・ミイナOUT

マオ「なに？なんなのこれ！？」

グレイ「次々と頭の中に流れ込んできやがる」

アール「皆様の記憶でしょうか……？今よりも幼い頃の」

御使い「そして、暗闇でもがく少年の隣に芽生えた小さく奇妙な命」

グレイ（幼声）「もう嫌だ……誰でもいい……誰か俺を助けてよ……！！」

御使い「畏まりました。そのお願い、叶えて差し上げましょう！！」

パラドレストSE、ブル転、御使いOUT

グレイ「終わったのか…クソ、まだ頭がグラグラしやがる」

アール「マスター、御使い様が居ません」

グレイ「あのヤロー、一体何が目的なんだ」

マオ「グレイさん…最後に見えた記憶はひよつとして」

グレイ「…ああ、10年前の俺だ」

マオ「それじゃあ、グレイさんも？」

グレイ「俺は物心付いた時から独りだった。親の記憶なんてもんは無かったし気が付けば小汚ねえ

施設で育てられていた。やがて俺に人並外れた頭脳が備わっている事が分かると、施設の

連中は俺をアツサリと金で売り飛ばした。それからは道具の様にこき使われる日々が続いた」

マオ「そんな…」

グレイ「金と欲望だけが蔓延る真っ暗な世界…クソみたいな日々が続く中で、俺の唯一の

心の支えだったのがチャチなロボットの人形だった」

マオ「ロボット…？」

グレイ「一体いつからどうやって手に入れたのかも覚えてはいなかったが、俺はその人形といつも

一緒だった。そしてあの日、真っ暗な世界に押しつぶされそうになった俺は強く願った。

その瞬間眩しい光に包まれて、目の前に居たのがアールだった」

マオ「でも、アールくんはグレイさんが作ったんじゃない？」

グレイ「人間と同様に言葉を喋り、感情を持ち、炊事洗濯家事をこなしてビームを撃つロボット。

そんな物を人間が作るのとは不可能だ。もし可能に出来たとしたらそれはもう神の所業だ」

マオ「アールくんが……パラドレストの力で生まれた命」

アール「ごめんなさいマオさん、ボク達はずっと前からパラドレストが実在する事を知って

いました。ボクの存在がその何よりの証だから」

マオ「アールくん……」

アール「マオさん危ない！！」

マオ「え？」

銃声 S E、ライラ・ミイナ I N

グレイ「アール！」

マオ「アールくん！！」

アール「大丈夫……っ……！！」

ライラ「一番スキだらけの奴を狙ったんだがこりやラッキーだ、一番厄介な奴に当たってくれた」

マオ「ライラ！」

ライラ「動くな、今がどういう状況かくらいいは能天気なお前でも理解出来るはずだ」

マオ「っ……」

ライラ「追って来るなど忠告したはずだぞ、なのにノコノコとこんな所まで来やがって」

グレイ「テメエら二人だけか？ドミニクのヤローはどうした」

ライラ「途中のワケの分かんない仕掛けではぐれたよ。まあ、もうあんなヤツどうでもいいけどな」
グレイ「なに？」

ライラ「そんな事よりマオさつき面白い事を知ったよ。星降りの夜、あれはお前の親父が

引き起こしたらしいな？」

マオ「どうしてその事を！？」

ミイナ「さつき御使いさんが現れたんです。それで皆さんの記憶が頭の中に流れてきて……」

アール「…ボク達と同じです」

グレイ「全員同じような物を見せられたって事か」

ライラ「世界中の人達のお願いを叶えるか……その結果、中途半端に夢を見させられたこっちは
いい迷惑だよ」

マオ「そうだ、さつき見たライラ達の記憶。あれが本当ならミイナちゃんは……」

ライラ「ああ、アタシの妹のミイナは10年前に死んでいる」

アール「それじゃあそこに居るミイナ様は？」

ライラ「お前と同じだよ、こいつはアタシの願いによってパラドレストに生み出された存在だ」
マオ「ミイナちゃんが……」

ライラ「違う、こいつはミイナじゃない」

グレイ「どういう事だ、テメエがミイナを蘇らせたんじゃないのか？」

ライラ「肉体は確かにミイナ物だ。けどその中に宿った命はミイナじゃない、全くの別物だった」

アール「別物？」

ライラ「そう、こいつはホンモノのミイナとは似ても似つかないニセモノの存在だ」

マオ「ニセモノってそんな言い方……」

ライラ「ミイナはな！ 明るくて、どんな時でも笑っている子だった……あの子の笑顔だけがアタシの生きる支えだったんだ！」

グレイ「ライラ、テメエもしかして」

ライラ「……アタシ達も親の顔を知らない子供だった。でもなグレイ、アタシにはミイナが居てくれた、ミイナさえ居てくれたら他に何もいらなかった。なのにあの子は病気に なっちまって、アタシにはどうする事も出来なかった……」

マオ「確かにここに居るミイナちゃんとは違う存在なのかもしれない、でも10年も一緒に居たんでしょ！ それなのに……」

ライラ「関係ねえんだよ時間なんて！ いやむしろ共にいる時間が長くなればなるほど、

アタシはこいつが疎ましくなっていくた」

アール「……どうしてですか？」

ライラ「ミイナと同じ顔をしているのにこいつのやる事はいつも真逆だ。ビクビクと人の顔色を

伺いながら喋りやがるし、スープの味だつて真似出来やしない。目の前にミイナが居るのに もうあの子が居ないんだと思ひ知らされる。それが苦しくて腹立たしくて堪らないんだよ！」

グレイ「そこまで気に入らねえなら切り捨てればいいだろ、なぜ性懲りも無く一緒に居やがる」
ライラ「決まってるだろ、今度こそホンモノのミイナを蘇らせるためさ」

マオ「……パラドレスト？」

ライラ「ああそうだよ全てはそのためだ！こんなニセモノと一緒に居るのも、ドミニクみたいなクソつたれに従っていたのも全部、パラドレストでミイナを蘇らせる為にやってきた事だ！」

アール「それじゃあもし、そのお願いが叶ったら今ここに居るミイナ様は？」

ライラ「さあな、ミイナさえ蘇ればあいつはもう用済みだ。どうなるかなんて知ったこっちゃない」

アール「用済み……」

マオ「ねえミイナちゃんはそので良いの？捨てられるのが分かっているのに何とも思わないの？」

ライラ「無駄だよ、あいつはからっぽなんだ」

マオ「え……？」

ライラ「命令されれば何でも言う事を聞く、自分の意志など持たないからっぽの出来損ないさ」

マオ「そんな事無いよねミイナちゃん……ミイナちゃん！」

ドミニク・フィリアスカIN

ドミニク「やっと見つけたぞお前達！いったい今まで何を……つてぬおお！？？ドクター・グレイ！？」

フィリア「ドミニク様つたらはやく……つてげええ！？マオ！？」

アール「……なんていうタイミングの悪い人達なんでしょうか」

グレイ「クソ空気読めてねえな」

ドミニク 「どうやって闇の堅牢から抜け出したのかは知らんがここまでだ。お願いを叶えるのはこのドミニク・シヤドウフアングと決まっているのだからな。そうだろお前達？」

ライラ&ミイナ 「……………」

ドミニク 「何を黙っている、主の問いかけに応えないか！」

銃声 S E

ドミニク 「な……………何をするんだライラあ！？」

ライラ 「いつまでも上から物言ってるじゃねえぞ！側近ごっこはもうとつくに終わってるんだよ」

ドミニク 「なんだとお……………行く当てのない貴様らを拾ってやった恩を忘れたというのか！！」

ライラ 「これ以上邪魔するならば本当に殺す。あの兄弟のようになりたくなかったら大人しくしてろ」

フィリア 「あの兄弟……………お前、ジードとカーバに会ったのか？二人は今どこに居る！？」

ライラ 「死んだよ、アイツ等なら」

フィリア 「は？」

ライラ 「アタシが殺した。この銃で心臓を撃ち抜いてやってな」

フィリア 「ウソだ……………あの二人が死ぬわけ……………」

ライラ 「じゃあ試してみるか！？心臓を撃たれても生きていられるかどうか」

フィリア 「そんな……………ジード、カーバ……………」

ライラ 「アタシはどんな手を使おうと願いを叶えてみせる！だからもうアタシの前に立ち塞がるな」

ライラ・ミイナOUT

マオ「……ねえ、グレイさん」

グレイ「なんだ」

マオ「星降りの夜なんて起きなければよかったのかな？」

グレイ「どうしてそう思う」

マオ「だって、みんな傷ついてるじゃないですか！パラドレストに夢を見た人達みんな！

それに私があんなお願いをしなければお父さんだって……！」

グレイ「そうだな、そもそも世界中の人間を幸せにしようなんてこと自体、どうしようもなく

バカで傲慢な願いだ」

マオ「……っ」

グレイ「けどな、そのバカな願いに救われた奴も居る。それもまた事実だ」

マオ「え？」

アール「マオさん、星降りの夜が起きなければボクはこの世に生まれて来ませんでした。マオさん

はボクが生まれた事も間違いだっと思えますか？」

マオ「ううん、そんな事無い！だって私アールくんの事大好きだもん！」

アール「ボクもマオさんが大好きです。この世界に生まれるきっかけをマオさんがくれたから、

僕はマスターと出会うことが出来ました。本当にありがとうございます」

マオ「アールくん……」

グレイ「幸か不幸かなんて言うのは考え方一つでいくらでも変わる。御使いの奴が言っていただろ、
テメエの親父は最後笑っていたって。その親父が叶えてくれた願いをテメエが否定して良いのか」
マオ「……良くない、良いワケが無い！」

グレイ「だったら、今テメエがするべきことは何だ」

マオ「ライラを止めてミイナちゃんを救い出す。星降りの夜があので二人を不幸にさせたなんて

絶対に言わせない！！」

アール「行きましようマオさん、二人のもとへ」

マオ「うん！グレイさん、アールくん、私に力を貸してください！！」

グレイ「さつさと行くぞ、手遅れになる前にな」

マオ「よおおおし！いづくぞおおおおし！！！」

マオ・グレイ・アールOUT

ドミニク「…なんなんだいたい、私をのけ者にして話を進めるなあ！！！」

フィリア「うおおおお！！！」

ドミニク「わあああ！？びっくりしたあ！！！」

フィリア「ジード、カーバ、お前たちの敵は必ず取ってやるから安心して成仏しな！

ビューティートリニティのフィリアスカ様を舐めるんじゃないよおおお！！！」

ドミニク「……ってアレ？わ、私を置いて行くんじゃない！！！」

ドミニク、フィリアスカの後を追ってOUT、場転

8、願いの果て

御使い「ゴール一番乗りおめでとございます！さあ、まずは勝利者インタビューと参りましょ…」

ライラ「茶番はいい。アタシの願いが何なのかはもう知っているんだろ、今すぐ叶えやがれ！」

御使い「10年前に亡くなった妹の人格と記憶をそこに居る肉体に蘇らせる、それがあなたの

お願いで間違いありませんか？」

ライラ「ああそうだ。さっさと始めろ！」

御使い「………残念ながら、その願いを叶える事は出来ません」

ライラ「………は？」

グレイ達IN

マオ「いた！ライラ達だ！！」

グレイ「御使いも居やがる、まさかもう……」

ライラ「おい、今何て言った？」

御使い「あなたのお願いを叶える事は出来ない、そう言いました」

ライラ「ふざけんなよ……一番最初にゴールした奴が願いを叶えられるんじゃないのかよ！？」

御使い 「はい、その通りです」

ライラ 「じゃあなんで、アタシの願いを叶えられないなんて事になるんだよ!!」

御使い 「それは、あなたのお願いが唯一神でも叶えられない領分に踏み込んでいるからです」

ライラ 「領分？」

御使い 「元来神とはあらゆる命を生み出す力を持っています。しかしあなたが求めている人格や

記憶という物は、命が生み出された後に育まれていくもの、それを作り上げるといのは

例え神の力でも叶える事の出来ない領分なのです」

ライラ 「ワケの分からない事言っつてねえで今すぐミイナを……!!」

御使い 「不可能です。失われた命が、あなたの妹が蘇る事は絶対にありえません」

ライラ 「……じゃあアタシは何のために今まで」

ミイナ 「お姉ちゃん」

ライラ 「黙れえ!! お前がアタシをそう呼ぶんじゃねえよ! ニセモノのお前が!!」

ミイナ 「……大丈夫だよお姉ちゃん。私が必ず、お姉ちゃんのお願いを叶えてみせるから」

ライラ 「なに？」

ミイナ 「御使いさん、私からもお願いします。この体にミイナの人格と記憶を蘇らせてください」

御使い 「不可能です。神の領分を超えた力を行使すればどのような事態が起こるか分かりません」

ミイナ 「それでもほんのわずかでも可能性が有るなら私はそれに懸けます。お願いです御使いさん、

私を……ミイナにしてください」

御使い 「それが、あなたの選んだ答えなのです」

ミイナ「……はい！」

御使い「畏まりました。ではその願い聞き届けましょう！」

パラドレストSE、暗転、御使いOUT、明転

グレイ「収まった……のか」

マオ「ミイナちゃんは？どうなったの！？」

ライラ「……ミイナ？」

ミイナ「……おねえ……ちや……」

暴走SE、ミイナ豹変

ミイナ「つつつつ……！！ああああああああ……！！」

グレイ「なんだ！？」

アール「ミイナ様の生命エネルギーが急速に放出されています！！」

マオ「ミイナちゃん！！」

ライラ「なんなんだこれは……どうなってんだ御使い！？」

ドミニク「なっ、御使いが居ないぞ！？」

フィリア「まさか、あいつ1人だけ逃げ出したんじや！？」

ミイナ「ウウウウウ！」

グレイ「攻撃してくるぞ！」

アール「バリアー、アクション！」

バリアーSE、バリアー崩壊

アール「うわあ！！」

グレイ「クソ、なんてパワーだ！」

マオ「アールくん大丈夫！？」

アール「はい、へっちゃらです…」

衝撃SE

ドミニク「ぬうお！今度はなんだ！？」

アール「これは…この空間が、パラドレストそのものが震えています！」

グレイ「そうか、領分を超えた力を行使した影響でパラドレストも暴走を始めたのか！」

ドミニク「パラドレストの暴走だと？いったい何が起きると言うんだ！？」

グレイ「ミイナ一人であれ程のエネルギーを生み出しているんだ。それとは比較にならない物が

放出されると考えた方が良い」

マオ「そんな……」

ミイナ「アアアアア！！！」

フィリア「マズイ、もう一発来るよ！！！」

ミイナ「……ッ！ウウウウ……」

ドミニク「攻撃が飛んでこないぞ？」

マオ「もしかして、ミイナちゃんか？」

フィリア「どういうことだい！？」

マオ「ミイナちゃんの意識がまだ残っていて攻撃を止めてくれてるんだ。きっとそうだよ！！！」

グレイ「そういう事なら……アール、まだやれるな？」

アール「もちろんです」

マオ「グレイさん、どうするつもりなんですか？」

グレイ「いいかテメエら今から俺の言う事をよく聞け、そしてその通りに行動して見せろ」

ドミニク「な、なぜ私が君の命令など……」

グレイ「まずドミニク、それとフィリなんとか」

フィリア「フィリアスカよ！」

グレイ「テメエら二人はこのパラドレストの心臓部を探せ、そいつを何とか出来れば暴走を

止められるかもしれねえ」

ドミニク「心臓部だと？この非常識な空間にそんな物が有る保証がどこに……」

アール「いえ、どこからか異常なエネルギー反応を感じます。そこに辿り着ければあるいは……」

ドミニク「ほ、本当か！？」

フィリア「いいわ、見つけやるわよ。ビューティトリニティの名に懸けてね！」

ドミニク「ビューティ…なに？」

マオ「グレイさん私は！？」

グレイ「テメエはライラを説得しろ、ミイナを正気に戻せるとしたら恐らくヤツだけだ」
マオ「はい！」

グレイ「アールはミイナをここから遠ざける、出来るだけ時間を稼ぐんだ」

アール「了解です。マスター」

グレイ「よし、全員行動開始だ！」

ドミニク・フィリアスカOUT

ミイナ「ウウウウ！？」

アール「すみませんミイナ様、ちょっと付き合ってもらいます！」

アール・ミイナOUT

グレイ「今だ！」

マオ「ライラ！」

ライラ「無駄な事を……もう終わりなんだよ何もかも」

マオ「無駄じゃない！ライラだって見たでしょ、ミイナちゃんの意識はまだ残ってるんだよ！」

ライラ「何度も言わせるな、あいつはミイナなんかじゃない」

マオ「どうしてそこまで認めないの！？ミイナちゃんはあるになつてまでライラの事を……」

ライラ「認められるわけねえだろ！！それを認めちまったらアタシは……」

グレイ「怖いのか？」

ライラ「なに！？」

グレイ「ミイナの存在を認めてしまえばテメエの中にいる妹が消えちまう、それを恐れてるんだろ」

ライラ「だ、黙れ！」

マオ「ライラ、家族を亡くす辛さは私にも分かるよ。私だってお母さんも……お父さんも

死んじゃった。でも二人との思い出は私の中で消えずにちゃんと残ってるよ？」

ライラ「お前なんかと一緒にするな！トレジャーハンターなんて気楽な生き方をしてきたお前とは

違うんだ！！」

マオ「そうやって何もかも拒むから、ミイナちゃんの事も見えなくなっちゃうんじゃないの！？」

ライラ「なんだと……？」

マオ「ライラ言ったよね、ミイナちゃんの事からっぽだつて。けど私はそんな風には思わない！

だつてミイナちゃんはおルディナ洞窟で私のケガの心配してくれた。みんなを労わろうと

スープの味を変えてくれた。あんなに優しい子がからっぽなわけじゃないじゃんか！」

ライラ「たった数日一緒に居ただけのお前にアイツの何が分かるって言うんだよ！！」

マオ「その私に分かる事がどうして分からないんだよ!!!!!!」
ライラ「……あああああああ!!!!!!」

銃声 S E、場転

ドミニク「1000有る魔術の一つ……闇の堅牢！」

闇の堅牢 S E、モンスター悲鳴、3回繰り返したらファイリアツツコミ

ファイリア「そればつかじゃねえか!!!」

ドミニク「え？」

ファイリア「さつきから同じ足止めの術ばつか、他に使える魔術は無いんかい!!!」

ドミニク「いやこれだけだ。だって私インドア派だし」

ファイリア「だったらカッコつけて1000有る魔術とか言うな！無駄に期待させるんじゃないよ！」

ドミニク「ふい、ファイリアスカ？さつきからお言葉遣いが宜しくないような……」

ファイリア「ああ!？」

ドミニク「なんでもないです」

ファイリア「チツ、それにしても心臓部なんて全然見つかりやしない。やっぱり私一人じゃ……」

モンスター出現

ドミニク「ファイリアスカ！危ない！！」
ファイリア「え……きやあ！！」

ジード・カーバIN

ジード&カーバ「紫電雷光稲妻ビリビリライトニングナックル！！」 「すごいひだりうで」

雷撃SE、すごいSE、モンスター悲鳴

ドミニク「な、なんだあの二人は！？」

ジード「雷光一闪、紫電の右腕ジード参上！！」

カーバ「すごひで、カーバさんじょー」

ファイリア「アンタ達生きて……あの小娘に心臓を撃たれたんじゃ！？」

ジード「こんな事も有ろうかと！胸ポケットに忍ばせていたんすよこのオルディナイト鉱石をね！」

カーバ「やっつてて良かった、火事場泥棒」

ファイリア「……………」

ジード「あれ？ファイリア姐さん？」

カーバ「おーい」

フィリア「うええええん！ジードお、カーバあ、生きてて良かったよおお！！！」

ジード「のわあああ！姐さん苦しい！苦しい！！」

カーバ「今度こそ本当に死ぬ……」

ドミニク「ぐすつ……良かったなあ、フィリアスカ！」

モンスター出現

ドミニク「むつまだいたのか！」

フィリア「バカな奴らだね、3人揃ったビューティトリニティに敵うと思ってるのかい！」

ジード「姐さん、ここはオレとカーバに任せてくれ！！」

フィリア「おうともさ！やっちまいなお前たち！！」

ジード「よっしゃあ！行くぜカーバ！！」

カーバ「兄者、大切な事を忘れてはいけない」

ジード「なんだ？」

カーバ「僕達の必殺技は……一日に一発しか打てない」

ジード「あ」

モンスター続々と出現

ジード&カーバ「逃げろおおおおおおおおお！！！！」

フィリア「お前たち何しに来たんだあ————！！！！！！！！」

ドミニク「わ、私をおいていくなああ————！！！！！！！！」

ドタバタとOUT、場転、銃声SE

ライラ「……なんでだ、どうして当たらない！？」

マオ「ライラも本当はこんなことやめたいんだよね、だったらその銃を捨ててこっちに来て」

ライラ「違う！アタシはこの日の為に生きて来たんだ！！今更やめることなんて……」

グレイ「ライラ、テメエに一つだけいい事を教えてやる」

ライラ「なに！？」

グレイ「10年前の俺のお願いはな……孤独から救い出してれる友達が欲しかったんだ、なのに

蓋を開けてみればロボの人形に命が宿ったヘンな奴だった。テメエなんかよりもよっぽど
的外れなお願いの叶い方だったんだよ」

ライラ「お前も後悔してるってのか？だったら！！」

グレイ「けどな、成り行きで始まったアイツとの生活は悪くなかった。真つ暗だった俺の世界に

アイツが光をくれたんだ。だから、俺のお願いを叶えてくれたどっかのバカには本当に

感謝している」

マオ「グレイさん……」

マオ「……………ミイナちゃんが、止まった。よかったあ」

グレイ「ご苦労だった、アール」

アール「ぶい」

ライラ「……………ミイナ」

ミイナ「おねえちゃん……………ちがうよ…わたしは」

ライラ「バカやろう……………こんなにボロボロになって、争いが何よりも苦手な甘ったれのくせに」

ミイナ「ごめんなさい…」

ライラ「スープの味付けも全然真似出来ないし、笑うのもヘタクソで、お前は本当にダメな奴だよ」

ミイナ「……………おねえちゃん？」

ライラ「本当は見えていたのに見えないフリをしてきたんだ。だってそうじゃないと…」

ミイナ「わかつてる……………おねえちゃんは…ミイナがだいすきだもんね」

ライラ「そうだよ、だからアタシは！」

ミイナ「だからわたしはね……………ミイナになりたかった…そうすれば……………おねえちゃんのことを…」

ライラ「どうしてだ！！どうしてお前はそこまで…」

ミイナ「そんなのかんたんだよ……………わたしはおねえちゃんのことがかいだいすきだから…だから…」

ほんとうにこころのそこから……………おねえちゃんのおねがいをかなえたかっただけなんだ」

ライラ「……………ごめん、ごめんミイナ！！」

ミイナ「おねえちゃん……………わたし…ミイナじゃないよ」

ライラ「そんな事無い！！お前はミイナだ、アタシの妹のミイナだよ！！！」

ミイナ「……いいの？わたし…ミイナでいいの？」

ライラ「ああ！……ああ！」

ミイナ「そつか……うれしいなあ」

マオ「……グレイさん、ありがとうございます。二人の事を助けてくれて」

グレイ「俺はただ一番合理的な判断で行動しただけだ、勘違いすんな」

マオ「もう、グレイさんてば本当に……」

アール「素直じゃないですねえ」

マオとアール笑いあう、衝撃SE

マオ「うわっ！？」

アール「この衝撃……またパドレストが揺れています」

グレイ「ドミニク達めしくじりやがったか！？」

ドミニク・フィリアスカ・ジード・カーバIN

ドミニク「ドクター・グレイ！」

グレイ「ドミニク、心臓部は見つかったのか！？」

ドミニク「それが……」

マオ「あれ……双子が生きてる!？」

ジード「おうともよ!こんな事も有ろうかとオルデイナーイト鉱石を…」

カーバ「兄者のほか、今そんなことしている場合じゃないっす」

ジード「そうだった!ヤベエのがヤバイ事になってマジ激ヤバなんだった!!」

グレイ「ドミニク、通訳しろ」

ドミニク「心臓部と思われる物体は発見することが出来た。だが尋常ではないエネルギーが

拡散していて我々では近づく事すら無理だったのだ」

マオ「でもその心臓部っていうのを何とかしないと、パラドレストの暴走は止まらないでしょ?」

フィリア「この揺れも段々大きくなってきている、いつ暴発してもおかしくないかもしれないね…」

マオ「そんな……」

ライラ「アタシがなんとかする」

マオ「ライラ?」

ライラ「元はと言えばすべての原因はアタシだ。ケジメはこの手で付ける」

ジード「ムチャだぜ、あのヤベエエネルギーは気合でなんとかなるもんじゃねえ!」

カーバ「下手すれば即死っす」

ライラ「それでもこのままには出来ねえだろ!誰かがやらなきゃ……」

ミイナ「おねえちゃん…」

ライラ「ごめんなミイナ、お前だけでも生き延びてくれ。アタシともう一人のミイナの分まで」

ミイナ「そんな事……出来ないよ!」

マオ「グレイさん、何か方法はないんですか？」

グレイ「……………」

マオ「グレイさん！」

グレイ「うるせえな今考えてんだろうが！！！」

マオ「っ……！」

アール「マスター、もう気が付いていますよね。答えが一つしかない事を」

マオ「え？」

グレイ「いいから黙ってる、今他の方法を……」

アール「もうそんな時間は有りません、らしくないことはやめてください」

グレイ「なんだと……！！？」

アール「合理的な判断をしてください。マスターの得意技でしょう？」

マオ「グレイさん……？」

グレイ「……心臓部にアールを向かわせ、俺達は速やかにここから脱出する。それが唯一の解決策だ」

ライラ「だからそいつはアタシの役目だって言ってるんだろ！」

アール「残念ですがそれではライラ様が犬死にするだけです。事態の解決にはなりません」

ライラ「けど……！」

マオ「だ、大丈夫だよライラ！今までだって何度もアールくん力でピンチを乗り越えて来たんだ

もん。今回だっけと無事に解決してくれるよ、そうですよねグレイさん！？」

グレイ「……………」

マオ「なんで黙ってるんですか？アールくんも無事に帰って来られるんですよね？」

グレイ「……暴走したパラドレストのエネルギーをアールのエネルギーで相殺し消滅させる。

その結果アールが無事でいられる可能性は……0%だ」

マオ「そんな、グレイさんはそれで本当に良いんですか！？」

グレイ「良いワケねえだろ！頭の中で何万通りもシミュレーションをした、けどもうこれしか方法が思いつかねえんだ」

マオ「でもそれじゃあアールくんが……！」

アール「マオさん、聞いてください」

マオ「アールくん……」

アール「マオさんのお陰でボクは色々な人達と出会えました。ビューティトリニティの皆さん、ライラ様にミイナ様、ドミニク様も今となつては別人みたいです。沢山の出会いが有つて沢山傷ついて沢山の事を学びました。きっとこれが『冒険』というものなんですよね？」

マオ「……そうだよ、この世界にはまだまだアールくんが知らない事でいっぱいなんだよ。だからもつと一緒に冒険しよう、こんな所でお別れなんてイヤだよ！」

アール「ボクも本当はもつと冒険がしたかったです。でもそれ以上に、ここに居る皆さんと世界中に広がる命を守りたい。ですからボクに行かせてください」

マオ「……アールくん」

アール「皆さんのお願ひもいつかきつと叶います。パラドレストなんか頼らなくても叶える事が出来るってボクは信じています。だから生きてそれを証明してみせてください」

ドミニク「約束しよう。ドミニク・シヤドウフアングの名に懸けて」

フィリア「仕方ないから、私も約束してやるわ」

ジード&カーバ「俺も約束するぞロボおおお!!!!!!（僕も約束するっす!）」

ミイナ「アールくん、いっぱい傷つけてごめんなさい」

ライラ「お前の事、生涯忘れない」

アール「……………マスター」

グレイ「なんだ」

アール「ごはん、ちゃんと食べてくださいね。それから引きこもってばかりはダメですよ」

グレイ「……………うるせえぞ、ポンコツが」

アール「最後まで口が悪いですねクソ雑魚マスターは。それじゃあ皆さん行って下さい。さあ早く」

ドミニク・ライラ・ミイナ・トリニティOUT

マオ「アールくん……………ありがとう!」

グレイ「……………じゃあな、アール」

グレイ・マオOUT、索敵SE

アール「……………心臓部の索敵完了。最終任務、開始」

9、脱出

ドミニク「くっ……どんどん揺れが酷くなってきたよ！」

ジード「そもそもこんな迷路みたいな場所からどうやって脱出すりゃいいんだよ!？」

カーバ「乗り込んできたアレ、飛空艇を見つけたらいいじゃないっす」

フィリア「それだ!!!んでソイツは何処に有るんだい!？」

カーバ「それは僕にも分からないっす」

ジード「つだあー!!チクショー!!出てこい飛空艇ー!」

4人「飛空艇ー!!!」

ミイナ「はあ……はあ……」

ライラ「ミイナ、大丈夫か？」

ミイナ「はあはあ……ごめんなさい」

ライラ「心配するな、お前の事は必ずアタシが守ってやる」

ミイナ「……おねえちゃん」

マオ「そうだよミイナちゃん、必ず生きて帰るの。私達全員で!」

グレイ「それがアールとの約束だからな」

ミイナ「……はい!」

シヤツフルSE

グレイ「景色が変わった!?!」

ドミニク「おい、あれを見るろ!!」

マオ「あれは……飛空艇!?!」

フィリア&ジード&カーバ「助かったああー!!!!」

グレイ「全員急いで乗り込め!!」

場転、心臓部

アール「これがパラドレストの心臓部。これにボクの残りのエネルギーを全てぶつけられ……」

御使い「パラドレストは消滅するでしょう、君と共にね」

アール「御使い様……ごめんなさい、神様が作ってくれたパラドレストをこんな風にしてしまつて」
御使い「構いませんよ、これもまた人が選択した結末であるのなら、有るがまま受け入れましょう」

アール「教えて頂けませんか? 神様がどうしてパラドレストを作り出したのか」

御使い「大した理由ではありません、永劫を生きる神の単なるきまぐれに過ぎないのですから」

アール「きまぐれですか」

御使い「しかし、そのきまぐれによって生み出された命が神の理に逆らい、結果新たな人の可能性を示した。それだけでもパラドレストを生み出した価値は十分に有りましたよ」

アール「……まるで神様本人みたいない言い方ですね」

御使い「おっと……これはミステイク!!!!」

アール「御使い様、あなたはひよつとして……」

御使い「そこまでです、世の中には解き明かさないう方が面白い事も存在するのですよ。アール」
アール「……分かりました」

御使い「さあ急ぎなさい、君の仲間達も無事に脱出出来たようですから」

アール「あの、最後に一つだけボクのお願いを聞いてもらえませんか？」

御使い「パドレストはもう滅びます、その願いが叶うかどうかは私にも分かりませんよ」

アール「届けてくれるだけで良いんです、ボクの声をあの人の下に」

御使い「良いでしょう、言って御覧なさい」

アール「ありがとうございます。ボクの、最後のお願いは……」

御使い「……確かに聞き届けました。叶うと良いですね、そのお願い」

微笑むアール、爆発SE、暗転

10、最後のお願い

マオ「あくくく!!! やつと見つけたあー!!!」

グレイ「うつせえな! いきなりデケエ声出すんじやねえよ」

マオ「だってグレイさん、あの後急に姿を消したから探し出すのに一か月もかかったんですよ!」

グレイ「あーそうかい良かったな見つかって、ほらさっさと帰れ」

マオ「帰りませんよ！話したい事が山ほどあるんですから！！」

グレイ「うぜえ」

マオ「ていうか、なんでわざわざオルディナ洞窟なんか引越したんですか？」

グレイ「前の家は色んな奴に知られ過ぎたからな、新しい拠点が必要かと思っただら何故か」

危険なヌシが居なくなった洞窟を偶然発見してな、こうして住まわせてもらってるって訳だ」

マオ「まさか、あの時の課題はそのためにな……？わあー！私ってば都合よく利用されてたんだー！」

グレイ「テメエが言うな」

マオ「でも、それならどうして教えてくれなかったんですか？ずっと心配してたんですよ」

グレイ「テメエからの依頼はとくに果たしたんだ。俺達の関係はその時点で終了、

その後の動向をいちいち報告する義務はねえだろ」

マオ「……そうやってこれから先も、独りで生きていくつもりなんですか？」

グレイ「……」

マオ「そんな事アールくんだって望んでないと思います。だってアールくん言った

じゃないですか、引きこもってばかりじゃダメだって。あれって多分家の中になって

事だけじゃなくて心の中になって意味も……」

グレイ「あーもううるせえな！ほら！！」

マオ「うわぶっ！もう何ですか、いきなり物を投げたりして」

グレイ「いいから読んでみろ」

マオ「えつと……『アール再生プロジェクト』？グレイさんこれは！？」

グレイ「見ての通りだが」

マオ「見ての通りって、アールくんを作るのは人間じゃ不可能だって言ってきましたよね？」

グレイ「俺が作れないと言ったのはあくまで過去の話だ。この10年で取り続けたアイツの

データを元に新たな理論を構築していけばやってやれない事はない」

マオ「で、でも、人格や記憶は神様でも作れないって……」

グレイ「神でも成しえなかつた事をこの俺が成し遂げる、面白れえじゃねえか。何年、いや何十年掛かろうと挑んでみる価値は十分にある」

マオ「何十年で、アールくんの為に残りの人生全部使うつもりなんですか!？」

グレイ「聞こえちまつたからな、アイツの最後のお願ひ。なら叶えてやるしかねえじゃねえか」
マオ「グレイさん……」

グレイ「これで分かつただろ、俺はもう誰からの依頼も受けるつもりはねえ。だからテメエも

二度とここへは来るな」

マオ「……うん、決めました!」

グレイ「ああ?」

マオ「トレジャーハンター・マオは本日をもって引退いたします!そして今日からは

ドクター・グレイの助手として生きていく事をここに宣言します!」

グレイ「……何言ってるんだテメエ?」

マオ「アールくんが完成するまで私が代わりに助手になるって事です。どうです?名案でしょ!」

グレイ「バカな事言ってるじゃねえぞ、そんな事してテメエに何の得が……」

マオ「はいじゃあ決まりです！早速生活に必要な物をここに揃えないとな〜え〜つとメモメモ…」
グレイ「おい聞いてんのかよ、俺は……」

マオ「そう簡単に独りになんかさませませんよ……マスター」

グレイ「……どこまでも勝手なヤローだな。せいぜいこき使ってやるから覚悟しとけよ、マオ」
マオ「はい！！……ってあれ、今私の事マオって、初めて名前呼びましたよね！？」

グレイ「知らん」

マオ「前から気になってたんですよ！他の人は名前で呼ぶのにいつも私の事はテメエって、
ねえねえ！もう一回、もう一回呼んでください！！」

グレイ「いいからさっさと買い出し行ってこい、じゃないとクビにするぞ」

マオ「いいじゃないですかー！ねえマスター！！」

暗転、エンドロールへ

11、エピソード 数十年後、起動SE、明転

アール「おはようございますマスター……ずいぶん、老けましたね」

完